

今日からできる 『社会貢献』

スポーツの
もうひとつの効用

第11回

(株)NTTデータ経営研究所
村橋 保春

スポーツの見方が変わる

なんとさわやかなことだろう。なでしこジャパンが日本人の気持ちをとても晴れやかにしてくれる。彼女たちは、次々と現れる強敵を、これまで一度も勝ったことがないというとても大きく大きな強敵を、打ち破っていく。全員が一致団結して、苦勞して苦勞して最後の最後で勝ちを引き寄せる。しかし、そこに悲壯感はない、妙な精神論を唱えることもない。勝利を目指すと宣言しても、それを過度に自らに課すこともない。

えに立たない。勝つことでチャンピオンという絶対的な結果を得ることが出来る。準優勝のアメリカは、日本に負けたことを悔しがるより、日本がチャンピオンになったことを祝福してくれた。スポーツにおけるプロセスの見方、結果の味わい方が大きく変わる。

結果が出るまでやりとおす

スポーツは競技のプロセスとすらある。スポーツは競技のプロセスとともに、その結果にも注目しなければならない。スポーツは共通するルールの下、一定の期間内でお互いに競い合い、必ず結果が出るのである。実社会では何か行動を起こすとき、共通するルールは希薄で、競合を含む利害関係者の枠組みは明白でなく、いつ結果が出るか不確かである。スポーツというシミュレーションを通じて疑似体験ができ、実社会の行動に反映させることができる。

スポーツは運動能力、精神力、協調性を高める。少しでも早く走るために、少しでも多くの得点を得るために、身体を鍛え、緊張感に打ち勝ち、戦略に従って活動する。人々は鍛え上げられた身体から繰り広げられる美技に酔い、緊張の極限のなかにあっても挑み続ける心の強さに励まされ、画期的な戦略による局面の転換に驚かされる。ただしこれらはいずれも、競技の過程、プロセスに関わる。日本人はこうしたプロセスを重視し、相撲道、野球道など、「〇〇道」として精神性を高め、時として神聖な対象にまで昇華させてしまう。勝敗にこだわることを戒める場合

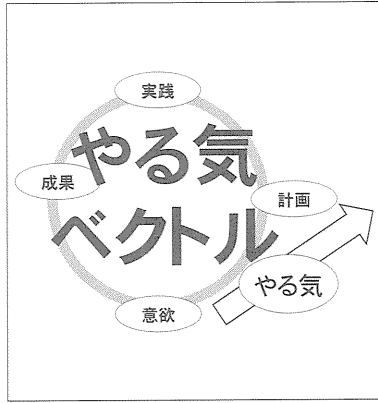
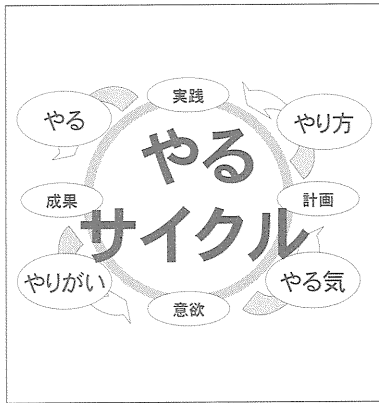
スポーツは必ず結果が出る。結果が出るまでやりとおすものである。この『結果が出るまでやりとおす』ということが、運動能力等の鍛錬とともにとても重要となる。スポーツ以外の活動を振り返ってもらいたい。社会活動をして、問題意識を持って何かを計画することは多い。出来上がった計画に基づきまずは取りかかってみることもよく見られる。しかし、計画は活動の開始段階を取りまとめた

だけで、どこまでやるか、どういった成果を目指すかを明らかにしたものは少ない。

経営を考えるうえでPDCAサイクルという概念がある。PはPLAN（計画）、DはDO（実行）、CはCHECK（確認）、AはACTION（改善）である。計画を結果が出るまで実行し続け、その結果を確認し、改善策を考えて、次なる計画に反映させる。計画に始まり、計画に戻ることからサイクルとして捉えられる。

私は社会活動に関わる講師をする時、このPDCAサイクルを「やる気ベクトル」と「やるサイクル」にアレンジして話をさせていただく。「やるサイクル」とは、意欲を持って「やる気」を起し、やる気を計画に落とし込んで「やり方」としてまとめ、実践として「やる」ことを成果が上がるまでやり続け、成果を得ることで「やりがい」を感じ、次なるより高い意欲へと展開していくサイクルである。ところが実際には意欲を持って計画策定に取り掛かるものの、

やる気が続かずそのまま立ち消えになる、計画が何とか出来上がった実践に移ってもこれもいつしか立ち消えになることが多い。一回転せず（サイクルとならず）、一方向に行つたきり（ベクトル）となる。成果（結果）にたどり着けない



ことをこうした図で説明をする。このように考えると、必ず結果が出る、結果が出るまでやりとおすスポーツの意義、効用がお分かりいただけると思う。

誰でもスポーツ活動を支援できる

社会貢献の一つとして、スポーツ活動の支援がある。とくに、子どもたちのスポーツ活動を支援することが多い。少年野球、ソフトボール、少年サッカー、柔道、剣道など。なでしこジャパンの大活躍で、女の子のサッカーブームは巻き起こるはずである。そして、男の子の専売特許と思われていたスポーツ種目にもどんどん女の子が入り込み、活躍することが期待される。

たとえば少女サッカー活動を支援するとき、必ずサッカーの競技経験が必要であろうか。ボールの扱い方について教えるとき、競技経験があるほうがいい。サッカーのルールは理解していないと、子どもたちに教えることはできな

い。勝つための戦略を練るうえで、経験は戦略の精度を高める大切な要素となる。

スポーツ活動支援においてそのスポーツ種目の競技経験は有効である。しかし、スポーツのもうひとつの効用を見つめ直してほしい。結果が出るまでやりとおすと、そしてその過程をしつかりと把握することである。身体機能を高めるばかりがスポーツの目的ではない。スポーツを通じてやりぬく力をつけ、社会に出たときに参考となる多くのシミュレーションを重ねていくこと、つまり社会性を高めていくことをスポーツが教えてくれる。

人生の先輩として、「やるサイクル」を指導できる人はスポーツ活動の支援もできる。もしスポーツ活動の支援にしり込みしている方がおられたらぜひこの考え方に立ってもらいたい。社会貢献の基盤は、できることをできる範囲で関わることである。できることはかならずある。そして、思いのほかいっぱいあるものである。